論文の内容の要旨

論文題目　　死者と生者の声を紡ぐ金石範文学

――『鴉の死』から『火山島』まで――

氏　　名　　趙　秀一

本論文の目的は、在日朝鮮人作家・金石範（キムソクボム）（1925～　）の『鴉の死』から『火山島』までの作品を分析対象とし、どのような語りの方法で「済州四・三事件」（〔1947 年 3 月 1 日〕1948 年 4 月 3 日～1954 年 9 月 21 日、以下〈四・三〉と略記）をめぐる死者と生者の声を紡ぎ出すかについて考察し、金石範文学を読む新たな視座を提示することである。

本論文が分析対象とする作品は、作品集『鴉の死』に収録されている五つの短篇―「看守朴書房（ソバン）」（『文藝首都』1957 年 8 月号）、「鴉の死」（『文藝首都』1957 年 12 月号）、「観徳亭」（『文化評論』1962 年 5 月号）、「糞と自由と」（『文藝首都』1960 年 4 月号）、「虚夢譚」（『世界』1969 年 8 月号）―と、1971 年芥川賞候補作「万徳幽霊奇譚」（『人間として』第 4 号、1970 年 12 月）、「長靴」「故郷」「彷徨」「出発」の 4 部連作からなる『1945 年夏』（筑摩書房、1974 年）、「遺された記憶」（『文藝』1975 年 9 月号）、「乳房のない女」（『文学的立場』（第 3 次）第 5 号、1981 年 11 月）、そして 1976 年 2 月の連載開始から単行本化まで 20 余年をかけて完成された『火山島』（文藝春秋、1983～1997 年）である。そのうち、「観徳亭」は『鴉の死』（講談社、1971）、「遺された記憶」は初出、『火山島』は文藝春秋版を分析対象テクストとしている。その他の作品は、一番入手しやすい『金石範作品集』（全 2 巻、

平凡社、2005）所収のものを分析対象テクストとしている。

金石範文学は、朝鮮半島における植民地期、「解放空間」（1945～1948 年）、南北分断と朝鮮戦争（1950 年 6 月 25 日～1953 年 7 月 27 日）、日本における戦前と戦後を続くねじれた時空間を生きた様々な人間群像と、彼ら／彼女らを取り囲む暴力と差別の構造など、大陸-半島-列島を結ぶ東アジアの時空間と共鳴するモチーフに支えられていると言える。

問題なのは、金石範文学の最大テーマである〈四・三〉の記憶が、直接経験していない金石範という書き手によって日本語で保持されてきたことの意味である。そして、ジェノサイドの時空間を逃れて、かつての宗主国へ密航せざるを得なかった者たちの引き裂かれた証言に直面した聞き手としての金石範が、〈四・三〉を書く／語る主体となり、数々の証言とそれに対する自分の記憶を定位し直しつつ、死者と生者の声を紡いでいく格闘の過程を通らなければならなかったことである。

本論文は、このような書く主体としての書き手・金石範の立ち位置を、小説テクストの表現に即して捉え返したものである。また、国語としての日本語や国文学としての日本文学という自明なものを揺さぶる金石範の「日本語」に注目し、「日本語文学」としての金石範文学をいかに読むことができるか、その可能性を示している。

本論文は、第一部「金石範文学のはじまり―済州島三部作を読む」、第二部「金石範の「日本語」が生み出す人間像を問う」、第三部「書くことの原点を問う―なぜ書かねばならなかったのか」、第四部「『火山島』の世界を読み直す」の四部・十二章の構成となっており、その前後に序章と終章を置く。

金石範文学の『鴉の死』から『火山島』までの作品を分析対象とする本論文は、金石範という書き手が、〈八・一五〉と〈四・三〉に伴う痛みや死の記憶にどのように向き合い、それをどのような「日本語」をもって、いかに形象化しているのかについて考察していく。また、在日朝鮮人文学としての金石範文学を読む本論文は、在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総連）／在日本大韓民国民団（民団）、大韓民国／朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国-朝鮮民主主義人民共和国-大韓民国-日本という東アジア／アメリカ合衆国といった様々な境界と力関係や、作品が書かれた同時代の捉え返しに向き合うことになる。

まず、序章では、金石範文学の要ともいえる〈四・三〉と、金石範が本格的に日本語小説を書き始めた 1970 年前後の来歴について概略している。また、金石範の「言語と自由」と「在日朝鮮人文学」といった評論を中心に、彼が旧宗主国である日本で小説を書くための言語として選んだ日本語に対する向き合い方や創作の方法論について論じた。

第一部「金石範文学のはじまり―済州島三部作を読む」では、金石範文学の初期作品で

あり、済州島三部作とも呼ばれる「看守朴書房」「鴉の死」「観徳亭」をとりあげた。第一章では、「看守朴書房」の先行研究において注目されなかった主人公・朴書房の来歴と彼の移動に注目し、それを描写する表現に刻み込まれている歴史を浮き彫りにした。第二章では、本文異動によって主人公の人物像が変容した点や主人公と「でんぼう爺い」という人物は暗黙の同意の関係を結んで死者を弔っている点などを読解し、「鴉の死」に秘められた死者を弔う声を救い上げた。第三章では、「でんぼう爺い」を主人公とする「観徳亭」をとりあげ、物語における異化の語り、異人として描かれる「らい病患者」、異様な景色を撮るアメリカ兵の描写に光を当て、語り手と読者の相互作用によって生成される作品のテーマを読み解いた。

第二部「金石範の「日本語」が生み出す人間像を問う」では、1960 年から 1970 年にかけて発表された「糞と自由と」「虚夢譚」「万徳幽霊奇譚」を対象にし、主人公の人物像を形象化する「日本語」の特徴に焦点を当て、主人公と物語世界に秘められている作者の企図を明らかにした。第四章では、徴用工を描いた「糞と自由と」における知識青年型の主人公が味わう敗北と自由をめぐってその意味を生成する物語言説を分析した。主人公が欲した「糞まみれの自由」は『火山島』の李芳根の自由と響き合う。第五章では、金石範が七年ぶりに日本語で書いた「虚夢譚」を読み、「私」の故郷、言葉、〈八・一五〉に対する観念的な意識から在日朝鮮人の錯綜するアイデンティティを垣間見ることができた。第六章では、「万徳幽霊奇譚」における朝鮮語の世界を内包する金石範の「日本語」を読み解き、それを「翻訳」と位置づけた上で、主人公の人物像を形象する文体の構造や物語世界の構造を解き明かした。

第三部「書くことの原点を問う―なぜ書かねばならなかったのか」では、金石範の自伝的要素が濃厚な作品群―『１９４５年夏』「遺された記憶」「乳房のない女」―の読解を通して、金石範の書くことの原点は〈八・一五〉と〈四・三〉であることを導き出した。第七章では、「長靴（ちょうか）」「故郷」「彷徨」「出発」の四作からなる連作『１９４５年夏』を分析した。主に、主人公である在日朝鮮人青年・金泰造の主体的移動に焦点を当て、彼の異界での経験やそこで流動する自己に対して自問自答する内面を読むことで、彼にとっての朝鮮／日本、朝鮮語／日本語、一九四五年八月十五日の解放／敗戦の意味について考察した。第八章では、語り手「私」と作中人物「私」の不一致に注目し、〈四・三〉という死と隣り合わせの時空から生き延びるために海を渡った密航者の声（証言）を形象化した「遺された記憶」における物語戦略を明らかにした。第九章では、「遺された記憶」の五年後に書かれた「乳房のない女」をとりあげる。二作とも金石範という一個人が〈四・三〉に出会っ

た原点を題材にした物語である。ただ、「乳房のない女」の場合は、金石範という書き手の存在を強く意識させる作品であり、金石範と語り手「私」を切り離すことは難しい。それでも、まずは作品の表現と方法を、語りの時間と「私」の位相に焦点を当て、過去の様々な時点における自分の記憶を定位し直す「私」の営為を考察した。

第四部「『火山島』の世界を読み直す」では、金石範文学の真骨頂である『火山島』を三章にかけて考察していく。まず、第十章では、『火山島』の語り手は、二人の主人公に寄り添って語りつつ、様々な声を紡ぐ存在であることを示した。また、物語の大きな軸である李芳根と南承之という二人の主人公の相関関係から重層する語りの相互作用を解き明かし、『火山島』を読む視座を示した。次いで、第十一章では、あらゆる所有からの自由を追い求めていた李芳根における自由とは何か、そんな彼はなぜ自殺せねばならなかったのか、といった問いをたて、小説のことばに拠りながら答えを導き出した。最後に、第十二章では、緻密な内面描写を通して〈四・三〉という歴史的時空間における人間群像を社会と紡いでいく『火山島』に対し、日本語で書かれ日本語の読者に読まれてきたという当然な問いから、『火山島』における朝鮮半島の歴史的時空間は、日本のそれでもあるということを捉えた。と同時に、『火山島』は死者と生者の声を紡ぐ弔いの物語でもあることを明らかにした。

以上のように、本論文は『鴉の死』から『火山島』までの金石範文学、つまり 1957 年から 1997 年までの 40 年にわたる金石範文学の読解を試みたものである。金石範という書き手の「日本語」は、日本語の表記における漢字やルビ、そして括弧を活用し、日本語という言語体系の約束事を異化するものであった。もちろん、そうした技法は金石範文学だけに見られる独自のものではない。日本語と朝鮮語／在日朝鮮人の日本語交じりの朝鮮語との拮抗から生まれた在日朝鮮人文学によく見られる現象である。しかし、金石範文学に見られるその異化作用は物語世界の歴史性に深くかかわるものとして機能している点において区別されるべきである。また、その金石範の表現における歴史性とは、8 月 15 日（1945 年／1948 年）、4 月 3 日（1948 年）、4 月 24 日（1948 年、阪神教育闘争）、5 月 18 日（1980 年、光州民主化運動）といった日付が浮かび上がらせる歴史的時空間にかかわるものであったことも示した。さらに終章では、金石範はフィクションの世界で、死者の声と生者の声を紡ぐ巫女となり、沈黙や忘却を強いる権力に抗して語ることのできなかった死者をして語らしめ、生者をして押し殺しているものを語らしめる作家であることや、世界文学という観点から金石範文学の読み直しの可能性を提示した。